

# 兵庫・宮内堀脇遺跡

みやうちほりわき

- 1 所在地 兵庫県出石郡宮内町宮内堀脇
- 2 調査期間 一 第二次調査 一九九六年(平8)十一月～一九九七年三月  
二 第三次調査 一九九七年一〇月～一九九八年二月

3 発掘機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

4 調査担当者 西口圭介・岡本一秀

5 遺跡の種類 武家屋敷跡・水田跡

6 遺跡の年代 弥生時代後期～中世末



(出石)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

宮内堀脇遺跡は、山名氏宗家の居城であった此隅山城跡の西南の山裾から一段下がった水田部分に位置している。山側には入佐川を挟んで「御屋敷」と呼ばれる居館推定地が存在する。

調査は一九九五年度より実施しており、これまでに武家屋敷跡に伴う礎石建物・土塁・堀などを検出している。

第二次・第三次調査においては弥生時代後期から幕末に至るまでの遺構・遺物を検出したが、主なものは前年度に引き続き、此隅山城の武家屋敷に伴うものである。

遺構では前年度の調査区からのびる戦国時代の堀・土塁・礎石建物、鎌倉時代の水田畦畔、平安時代の人形や斎串が流れ込んだ水田、弥生時代から奈良時代にかけての田下駄や加工材が多量に入った水田が検出されている。

検出された堀は一本であるが、堆積によって大きく二時期に分けられ、上層を第二次調査ではSD八〇〇一、第三次調査ではSD四〇〇一と呼び、下層を第二次調査ではSD九〇〇一、第三次調査ではSD五〇〇一と呼称している。

遺物では、木簡のほか、人名を墨書した多量の土師器皿、中国製陶磁器、鍍金された陶器片、鉄砲玉、金銅装の小柄や鉄製の犁先などが出土した。戦国期より下層からは祭祀遺物が出土している。

このうち人名墨書土師器皿は、第二次調査・第三次調査にわたって上下層の堀より出土している。数度にわたって堀に投棄されたもので、時期は天文年間の末期から永禄年間の初期と考えられるものである。二〇〇点以上出土しており、そのなかには「たうゆふ」「めうきん」「めうかう」「めうしん」「めうしゆん」「ほうせい」

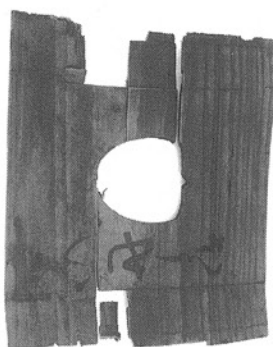
「そうかう」「そうけん」「寿けい」「とうひやうへ」「又六」「とらちよ」「おかめ」など三〇名以上の名が見える。同じ宮内地区にある総持寺観音堂の本尊、十一面千手千眼観世音菩薩像には、天文四年（一五三五）に造立された際、胎内に「惣持寺本尊造立勸進奉加帳」が納められている。奉加帳には、山名家当主である山名祐豊から武士・神官・僧侶・農民など幅広い階層の人々の名がのべ一五〇〇名以上も書かれており、そのなかには「道祐」「妙金」「妙心」「妙春」「藤兵衛」「又六」「虎千代」「おかめ」などの名が見える（出石町『出石町史第三卷（資料編Ⅰ）』一九八七年）。二〇年程の時間の開きがあるが、同じ宮内地区のなかでもあり、墨書土師器皿の人名と同一人の可能性は高いものと考えられる。これらの墨書土師器皿は追善供養に伴って使用されたものと考えられている。

# 8 木簡の积文・内容

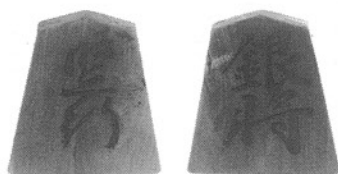
## 一 第二次調査

### 土壘内側

- (1) ・「帰本 道祐禪門霊位」  
・「天文廿三年七月廿三日」  
255×66×7 061
- (2) 「は  
ゆ  
い」  
120×160×2 061



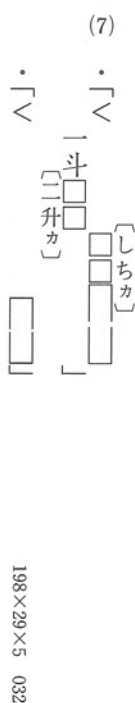
一(2)



一(4)

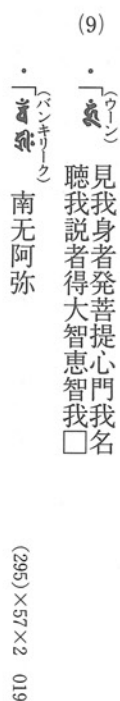
- (3) 「は  
ゆ  
い」  
190×246×2 061
- (4) ・「銀将」  
・「豎行」  
31×22×12 061
- 土壘上
- (5) 百之ひしやく  
(186)×24×10 081
- 堀SD九〇〇一
- (6) 「は  
ゆ  
い」  
143×286×2 061

堀SD八〇〇一

(7) 

遺構外

(8) 

(9) 

鎌倉時代水田土壌

(10) 

(1)～(4)は土壘の内側(武家屋敷内)からの出土である。  
(1)は位牌である。近接して重ねられた土師器皿が出土しており元の位置からは動いていないものと考えられるが、土坑などの埋納遺構は見つからなかった。白木製で、圭頭状の頭部をもつ札型牌身に長方形の板状台座がつく。ここに記された「道祐禪門」は人名墨書

土師器皿にある「たふゆう」、「惣持寺本尊造立勸進奉加帳」にある「道祐」と同一人である可能性が高い。また、袴狭遺跡の一九九三年の調査で、戦国時代の仏堂(三間堂跡)より出土した卒塔婆にも「道祐禪門」とある(本誌第一六号)。

(2)は三宝の脚部の外側面、宝珠形の透かしの横に墨書されている。「ほうせい」の墨書は人名墨書土師器皿にもある。

(3)は折敷の内面に墨書されている。

(4)は将棋の駒である。表面には「銀将」、裏面には「堅行」の墨書が達筆で書かれている。裏面が「堅行」であることから、「中将棋」の銀将と考えられる。

(5)は土壘上より出土した。形状及び文言からみて杓の柄に記された可能性が高い。

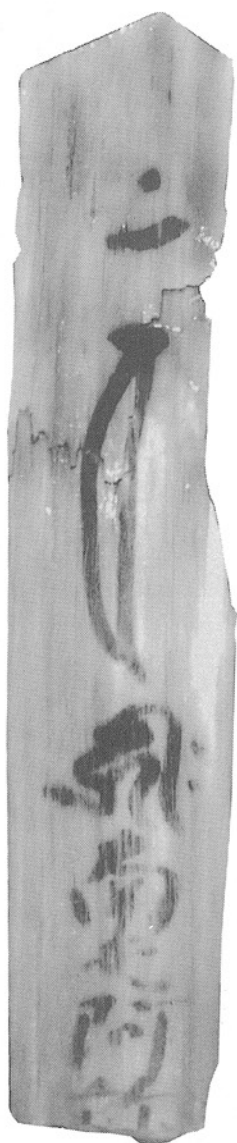
(6)は折敷の内面に墨書されている。「そうかう」の墨書は人名墨書土師器皿にもある。

(7)は上端の左右に切り込みを入れた付札である。他端は丸くおさめている。

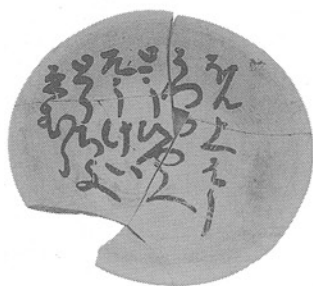
(8)は堀の外側の一六世紀後半の水田土壌より出土した。(9)は堀の外側の一六世紀中頃の水田土壌より出土した卒塔婆である。(10)は呪符木簡である。

二 第三次調査

堀SD四〇〇一



一(9)



(参考 墨書土師器皿)



一(10)



二(1)

(木簡は赤外線画像)

(1) 「過去有仏号威音王神×

(124)×27×0.5 019

堀SD五〇〇一

(2) 「上

(126)×263×3 061

(3) 「計

54

(90)×(103)×1.5 061

(1)は堀の肩部より人名墨書土師器皿とともに出土した。柿経の一部である。『妙法蓮華経』常不輕菩薩品第二十(『大正新脩大藏経』第九卷五一頁)の文言を記したものである。

(2)(3)は堀中より人名墨書土師器皿と共に出土した。(2)は折敷の底板である。外面中央に墨書されている。(3)は三宝である。脚部の外面、宝珠形の透かしの横に墨書されている。

木簡の釈読については奈良国立文化財研究所の館野和己氏・吉川聡氏・馬場基氏、兵庫県立歴史博物館の小林基伸氏のご教示をいただいた。

## 9 関係文献

兵庫県教育委員会『ひょうごの遺跡』二二(一九九六年)

同『平成八年度 年報』(一九九六年)

同『平成九年度 年報』(一九九七年)

(西口圭介)

## 木簡研究 第二二号

巻頭言—WEB版木簡データベースの公開に思う— 石上英一  
一九九八年出土の木簡

概要 平城京跡右京七条一坊十五坪 秋篠・山陵遺跡 葉師寺旧境内  
内 藤原京跡右京六条四坊北西坪 大藤原京跡左京北五条三坊南西坪  
飛鳥池遺跡 飛鳥池東方遺跡 飛鳥東垣内遺跡 川原寺跡 吉備池廃寺 長岡宮跡 平安京跡左京三条三坊十五町 平安京跡左京七条二坊八町及び本園寺 鳥羽遺跡 鳥羽離宮跡 大藪遺跡 興戸宮ノ前遺跡 武者ヶ谷遺跡 河守遺跡 難波宮跡 大坂城下町跡 長保寺遺跡 溝昨遺跡 玉櫛遺跡 釣坂遺跡 加都遺跡 豊岡城館遺跡 岩井枯木遺跡 宮内黒田遺跡 姫路駅周辺第四地点遺跡 古網干遺跡 六太A遺跡 櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区 内垣外遺跡 宇津宮辻子幕府跡 汐留遺跡 江戸城外堀跡(四谷御門外橋跡・御堀端通・町屋跡) 法光寺跡 白鷗遺跡 池之端七軒町遺跡 浅草寺遺跡 上千葉遺跡 宮町遺跡 小谷城跡(伝知善院跡) 尾上浜遺跡 屋代遺跡群(北陸新幹線関係) 榎田遺跡 一本柳遺跡 市川橋遺跡 柳之御所遺跡 志羅山遺跡 後田(旧月記) 遺跡 洲崎遺跡 福井城跡(1) 福井城跡(2) 神野遺跡 堅田B遺跡 広坂遺跡 中保B遺跡 東木津遺跡 栃谷南遺跡 榎井A遺跡 下ノ西遺跡 宅本杉遺跡 砂山中道下遺跡 下町・坊城遺跡C地点 船戸川崎遺跡 三田谷I遺跡 熊山田散布地 岡山城二の丸(中国電力変電所)遺構 新道(清輝小)遺跡 米田遺跡 百間川米田遺跡 四日市遺跡 下上戸遺跡 長登銅山跡 観音寺遺跡 平田七反地遺跡 元岡遺跡群  
一九七七年以前出土の木簡(一一)  
平城京跡左京二条二坊十坪  
釈文の訂正と追加(一一)  
長岡京跡(一八号) 東浅香山遺跡(二〇号) 伊興遺跡(一九号)  
シンポジウム「長屋王家木簡をめぐって」の記録  
削屑からみた長屋王家木簡:渡辺晃宏、長屋王家の米支給関係木簡  
:勝浦令子、長屋王家の経済基盤と荷札木簡:楠木謙周、討論のまとめ:東野治之  
木簡の撮影  
書評 今泉隆雄著『古代木簡の研究』 井上直夫 森 公章  
槩報

頒価 五五〇〇円 送料六〇〇円